

2011/7/10

聖霊降臨後第4主日(特定10)説教
聖マタイ福音書第13章1節～9節、18節～23節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

「耳のある者は聞きなさい。」イエスさまが「種を蒔く人のたとえ」を語られた後で、話を聞いていた群衆に言われたみ言葉です。「耳のある者は聞きなさい。」イエスさまは、このみ言葉で何を言わんとしておられるのでしょうか。

今日の福音書は、前半は「種を蒔く人のたとえ」です。後半はたとえを解説した部分です。その両方の間に、イエスさまは、何故、たとえを使ってお話しをなさるのか、その理由を弟子たちに語っている部分があるのですが、今日の福音書では省略されており、読まれません。その省略された箇所にはイザヤの預言が引用されています。このようなみ言葉です。

「あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、見るには見るが、決して認めない。この民の心は鈍り、耳は遠くなり、目は閉じてしまった。こうして彼らは目で見ることなく、耳で聞くことなく、こころで理解せず、悔い改めない。わたしは彼らをいやさない。」イエスさまは、このたとえを語ることによって、イザヤの預言が成就したと言われます。

イザヤが預言者とし召命を受けた時、「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」と言って、ユダとエルサレムの民の中へ神さまのみ言葉を携えて派遣されるのですが、その時に、神さまがこのように語るようにと与えられたみ言葉が、ここで引用されているのです。

この預言の言葉は、明らかに神さまの救いのみ言葉ではありません。むしろ逆のことが語られています。民が心を頑にして癒されることのないために、イザヤは遣わされて行くのです。神さまの裁きを述べるのが、イザヤの預言者としての第一の任務です。

その裁きの言葉を引用して、イエスさまは、群衆には天の国の秘密を悟ることが赦されていない。だから、たとえを用いて語るのだとその理由を述べておられます。弟子たちだけが、天の国の秘密、神の国の奥義を悟ることが赦されていると、弟子に与えられる恵みが語られています。

言い換えれば、天の国、神の国というのは、誰の目にも明らかな仕方でもってあらわにされるのではないということです。その秘密を見ることのできたものだけが分かるのです。神の国は、人間の理性や感性によっては捕らえきれないため、秘密という性格が必然的に伴うのです。理性や感性には覆われている、隠されていると言っても良いでしょう。だから、「耳のある者は聞きなさい」と言わざるを得ないのです。

この説教を準備している間に、ある本を読んでおりましたら、たまたまこのみ言葉に触れている文章が眼に止まりました。あるプロテスタントの信徒の方でアウグスティヌスやルターの研究をしている方が、説教について述べているものです。大学の教授ですから、講義と説教を比較して述べているのですが、このように言います。「言葉は人と人との間の領域で生起交流する生ける働きを持っている。だから説教や講義が上手に展開しないときには、その責任を語るものにのみ帰してはならない。講義でも満足できる内容になったことは稀かもしれないが、その責任はわたしだけにあるのではない」と言っています。語るものと聞くものとの両者の関係の中で、言葉は紡ぎ出されていくという、言葉には元来、対話的な性格があることを指摘しています。

説教者にとっては大変、救われるような言葉です。しかし、それに続く文書は襟を正して聞かなければならないような内容です。

「このことは説教についても妥当するのではなからうか。自分の説教したことの反応を期待したり、聴衆の歓心を買おうとすることは断じてあってはならない。説教者は神の言葉を伝達する使命を与えられているのであるから、一般の教師以上に聴衆から自律し、自己の使命にふさわしい尊厳を自覚すべきである。『聞く耳のある者は、聞くべし』というイエスの態度はなんという威厳にみちていることか。荘厳なる神の言葉を伝達する存在は当然このような尊厳をもっていなければならない」(『人間学から見た霊性』)。

説教者の姿勢について厳しい注文を寄せているわけですが、人に気に入られるようなことを喋るのではなくて、神さまのみ言葉を伝えることに専心することを求めています。当然のことを言ったまで、ということかもしれませんが、最近では、説教でも笑いを取ること

ばかりが先行して、肝心の神さまのみ言葉が、何処かに置き忘れられているようなことがないか、自らを含めて省みなければならぬでしょう。

イエスさまは、決して人におもねるようなことはなさりませんでした。へつらってご機嫌を取るために語られたのではありません。厳として神さまのみ言葉を語られました。語るだけではありません。み言葉を生きられたのです。そして、同じみ言葉に生きるようにと弟子たちを招かれました。み言葉を悟るよう信仰を求められました。それが、「耳のある者は聞きなさい」という勧告です。

ところで、マタイ福音書の13章は、イエスさまの天の国についてのたとえが集められています。たとえというのは、わたしたちの生活の身近にあるものや事柄を題材にして、分かりやすく語ろうとする時に用いられます。ある教えや教訓とか、抽象的な事柄を具体的なものに置き換えて、分かりやすく説明するのがたとえです。

毛利元就が3人の息子に1本の矢は難なく折ることができるが、3本まとめると折ることは難しいことを示して、3兄弟の結束を強く訴えたという有名な逸話がありますが、これも矢にたとえて生きるべき道を示したのです。

ところがイエスさまのたとえは、分かりやすくすることを目的にして語られたというよりも、むしろ、分からなくさせるために用いられています。わざわざ隠して語っているのです。天の国の秘密を悟ったものだけには分かるのですが、そうでないものには謎のままなのです。

それは丁度、預言者エゼキエルに臨んだ主の言葉が語っていることと同じようです。次のように始まっています。「人の子よ、イスラエルの家に向かって謎をかけ、たとえを語りなさい」(17:2)。反逆の家であったイスラエルに語られた主の言葉は、その謎が解かれなければ、意味を理解することはできなかつたのです。

それと同じように、イエスさまのたとえは、謎の言葉として語られています。

種まきのたとえに戻りますが、イエスさまの時代のパレスチナでの農業のやり方は、わたしたちが知っている日本のやり方とは、随分異なっていたようです。日本のお百姓さんなら、まず畑を耕して畝を作り、そこに小さな穴をあけて種を蒔いて、上から薄く土をかぶ

せるというやり方をするのだと思います。ところがパレスチナでは、初めに種を蒔いてしまう。その後から土を掘り起こして耕します。種が土の中に深く入らなければ、あちらは日差しが強いので、すぐに干からびてしまうのだそうです。種を蒔いてから耕すわけですから、種がどこに落ちようとも気にしなくて良いのです。一見、無駄の多いやり方のように思われますが、最終的には豊かな実りが得られるのです。

神の国は、このような種まきにたとえられています。効率の悪い宣教のやり方であるかのように見えるかもしれませんが、それがイエスさまのやり方なのです。種であるみ言葉を語り続けるのです。み言葉が、畑であるわたしたちの魂の奥深くにまで食い込んでくるように、イエスさまは蒔き続けてくださるのです。そこでみ言葉が成長することを、わたしたちも祈りつつ待ち望むのです。み言葉が成長すれば、わたしたちも豊かな収穫にあずかれるのです。

今日の旧約聖書日課は、「イザヤ第2の歌」と呼ばれている箇所です。そこには、「雨も雪も、ひとたび天から降れば、空しく天に戻ることはない。それは大地を潤し、芽を出させ、生い茂らせ、種蒔く人には種を与え、食べる人には糧を与える。そのように、わたしの口から出るわたしの言葉も、むなしくは、わたしのもとには戻らない。それはわたしの望むことを成し遂げ、わたしが与えた使命を果たす」(55:10-11)と歌われています。イザヤが歌った神さまのこの約束のみ言葉は、イエスさまの確信でもあったでしょう。

種まきは、一見、徒労とも思えるような働きであるかもしれませんが、神の国は、神さまの支配は、効率の良さで計れるものでもなければ、目に見える輝かしい成果をもたらすのでもありません。

預言者エリヤが、異教の神バアルを礼拝していた王妃イゼベルに命を狙われて神の山ホレブまで逃げて来たとき、改めて主から使命を与えられて、来た道を引き返せと命じられます。その折りに、山を裂き、岩を砕くような激しい風が起こります。しかし、そこには主はおられません。続いて起こった地震の中にも、更に火の中にも主はおられませんでした。

わたしたちは、劇的な激しい出来事の中にこそ、神さまはおられる。神さまが生きて働いておられるしるしは、万人が認めるような栄光に輝く力ある業の中にある。或いは、神さまの支配を保証するものは、日常生活を超えた特別な幸運を得られた時に認められる。そのように感じるのです。それこそ神業を見た時に、そこに神さまの存在を感じ取るのです。その方が分かりやすいのです。

しかし、そこには主はおられない。それが、エリヤの体験でした。そうではなくて、「静かにささやく声」を聞くことを通して主と出会うのです。その声は、危険な使命を果たすために、今来た道を引き返せと命じるのです(列王記上19章)。滅びに至る道は広く、命に至る道は狭く細いのです(マタイ7:13)。

愚直なまでにイエスさまのみ言葉に耳を傾ける。それが種を蒔いてくださるイエスさまに対するわたしたちの向かうべき姿勢です。自分が道端か、石地か、茨か、それとも良い地か、などと詮索する必要は全くありません。ましてや人のことを批評することなどあってはなりません。イエスさまは豊かな収穫を確信しておられるのです。そして、「耳のある者は聞きなさい」と、み言葉の謎を悟るようと、信仰の応答を求めておられるのです。

そのイエスさまの信仰に、わたしたちも連なるものでありたいと思います。